

ART FUL

2026.4 | 85

松本市美術館 NEWS [あーとふる]

ART EXHIBITION GUIDE 当館学芸員 原澤 知也

2025年に創立30周年を迎えたファッション・テキスタイルブランド「ミナペルホネン(minä perhonen)」の度「つぐ」という言葉をテーマに、様々な視点からミナペルホネンのものづくりへの姿勢や活動を知ることができる展覧会「つぐ minä perhonen」を開催します。

ミナペルホネンは、1995年に皆川明によって設立された「minä」を前身とし、2003年にフィンランド語で「私」を意味する「minä」に、同じく「蝶」を意味する言葉「perhonen」をブランド名に加えました。ファッションからスタートしたその活動は、次第にインテリアや食器をはじめ食や宿など、生活全般やホスピタリティを基軸とした活動へと広がってきました。

ミナペルホネンのものづくりは、デザ



1



2



3



4

イナナーの手作業によって生み出されるテキスタイルの図案からはじまります。そのデザインは、熟練の技術者でもある職人たちの対話と試行錯誤、工夫を重ねることによって、一枚の布、布から服、そして様々なインテリアプロダクトへと実を結んできました。

本展では、ミナペルホネンがこれまで生み出してきた千種類以上の図案や数千種類におよぶテキスタイルの中から、貴重な原画、代表的なテキスタイルに加え、強い信頼関係を結ぶ刺繍、織、プリント工場の様子を製作道具や素材、映像によって再現し、デザインからテキスタイルが完成する現場と共に、様々な「つぐ」を表現しています。

100年後も存続するブランドとしてのあり方を模索し、流行に左右されず、普遍的な価値を追求するミナペルホネン。そのものづくりの姿勢に触れ、自身にとつての「つぐ」を探さきっかけになれば幸いです。

TSUGU  minä perhonen

会 期 / 2026年4月16日(木)～6月7日(日)
会館時間 / 9:00～17:00(入場は16:30まで)
休 館 日 / 月曜日(5月4日は開館)、5月7日(木)
観 覧 料 / 一般1,600円、大学生1,000円

※高校生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料
※大学生は、観覧当日、学生証の提示が必要



展覧会公式サイト

50回

ポルカドット号探検記

布のいのち

松本市美術館館長 小川 稔

美術館の中庭で子供らが寝転び遊ぶ

五月の工芸月間、私たちは全国から多くのクラフトファンを迎えることになる。この時期に開催されるミナペルホネン展のタイトルに掲げられた「つぐ」という言葉から思い出したのは青森で作られてきた特別な夜着のこと。「ぼろ」は貧しい土地の農民が着古した麻布の切れ端も無駄にせず、「つぎはぎ」した衣裳だが、日々の生活の汗が染み込んだ布に不



"sea sky" 2025-26 "a/w Photo: Keita Goto(W)

思議な美しさが宿っている。

断片となった裂のいのちを繋いできた日本の文化がある。創業者・皆川明さんはミナペルホネンを100年つづくブランドに育てようとしている。文様で彩られた服は着る人を喜ばす。私たちの遠い祖先も簡素な労働着に摺染文様を忘れたかった。ミナペルホネンは北欧文化に触発されて始まったブランドだが、数々のデザインは現代の生活者の風土から生まれている。森や海の植物、動物が布上に息づき、動物園、植物園、水族館を身にもとうような楽しさがあるだろう。

ミナペルホネンは機械が生産するのでも手仕事の原理を重視するという。画一に繰り返すのではなく、わずかなゆらぎが布に温かな手触りをもたらす。個性差、速度を競いあうモダンデザインの原理とは別種の新しさとなつかしさが入り交じるのは、未来社会を見据えた物作りの循環、再生への提言だろう。

明治期以来、製糸産業の町であった松本で、布のいのちを継ぐ展覧会が開催されることを喜ぶたい。

Relay Essay

スウェーデンと日本民藝館

当館学芸員 稲村 純子

最近、スウェーデンと日本の民藝の関わりを知った。民藝運動を提唱した柳宗悦(哲学者)、濱田庄司(陶芸家)のふたりと式場隆三郎(精神科医)が、1929年にストックホルムを訪れている。その時の様子は、雑誌『工藝』第70号(日本民藝協会、1936年)にある「スカンセンの一夜」(式場隆三郎)に詳しく、「北歐への旅はこの世界最大の農民美術館をみるためだった。(原文ママ)」と書かれている。

農民美術館とは、ストックホルム郊外のユールゴーデン島にある北方民俗博物館と野外博物館スカンセンのこと。北方民俗博物館は、スウェーデンの文化、生活、工芸にまつわる収集品が展示され、伝統的な暮らしや手仕事の技を見ることが出来る。スカンセンは、工業化以前のこの国の様々な地方の暮らしを見せるために、家屋、教会などを移築した野外博物館である。共に民俗学者アルトゥール・ハゼリウスが創設した。

式場は「柳さんは、自分の夢が目のあたりに實現されてゐるのを知つて、いたく興奮した。柳さんは日本へ歸つたら、ハゼリウスの真似ではなく、もつと質において洗練した品々を集めて、日本に民藝館をたて日本民藝の最高水準を確立しようと決心した。(原文ママ)」と書いている。この訪問は、すでに民藝館の設立に向けて動いていた柳たちの情熱をさらに燃やす機会となったようだ。

20年ほど前に行った北欧への旅のなかで、このユールゴーデン島を訪れたことを思い出した。目指したのはローゼンダール・カフェ。一緒に行った友人が見つけてくれた場所だ。森の木立の中を歩き、自然のなかでランチを食べた。光がキラキラ輝く素敵な場所、自然と溶け合うようなスウェーデンの暮らしの一端を体感できた気がした。その近くに日本の民藝に影響を与えた場所があったとは。またいつか行くことができればと夢は膨らむ。



松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

松本市美術館 NEWS
あーとふる 編集・発行

〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22
tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
https://matsumoto-artmuse.jp

松本市美術館公式 SNSはこちらから ▶



X



Instagram



民藝百年

当館学芸員 北原 麻椰

「民藝」という言葉が誕生して100年という節目を迎えるなか、松本では改めて民藝への関心が高まっています。信毎メディアガーデンでは民藝百年を記念したシンポジウムが開催され、哲学者で明治大学理工学部准教授の鞍田崇氏による講演のほか、鞍田氏と松本民芸家具の代表取締役で長野県民藝協会会長の池田素民氏と当館館長の小川稔の3者による鼎談が行われました。会場では、民藝の思想を手がかりに、明日の暮らしを見つめ直す視点

が語られました。

当館では、第4期展示「民藝誕生と松本 暮らしの美をつくった人々」を開催中です。所蔵する池上百竹亭コレクションを中心に柳宗悦ら民藝運動の指導者の足跡と、松本の民藝運動と関わりの深い三代澤本寿、丸山太郎、池田三四郎、柚木沙弥郎らの仕事をご紹介します。民藝がまちの文化として根付き、松本のアイデンティティの一つになっていった歩みに思いを巡らせながら、ぜひご覧ください。



第4期展示「民藝誕生と松本 暮らしの美をつくった人々
—三代澤本寿・丸山太郎・池田三四郎・柚木沙弥郎—」
会期は5月31日(日)まで



池上百竹亭コレクションは、松本市の文人・池上喜作(号・百竹亭/1890-1978)が生涯にわたって蒐集した近代文芸資料を中心とするコレクションの総称である。その中でもとりわけ正岡子規とその門人に関する俳句・短歌の文芸資料は、数多くあり、池上と文人との交流を物語る書簡や原稿のほか、短冊や色紙、扇面などが、池上の趣向が凝らされた掛軸や屏風に仕立てられている。

正岡子規は現在の愛媛県松山市出身の俳人・歌人であり、写生(写実)に基づいた文学表現を主張し俳句・短歌の革新運動をおこし、俳句雑誌『ホトトギス』を創刊した。門人には、同郷の高浜虚子、河東碧梧桐のほか、伊藤左千夫、長塚節、岡麓、香取秀真らがいる。

下村為山もまた子規と同郷の画家で、絵を学ぶために上京したのち、子規と出会ったことで俳句を研究しはじめ、『ホトトギス』の表紙や挿画などを手がけた。

本作は、子規が詠んだ十句の原稿に為山

が添画し、碧梧桐が箱書きをしている。

掛軸の中廻しや天地を見ると、菜の花を想起させる絶妙な色合いの紬地が用いられ、一文字にはメダカが泳ぐような織地が施されている。

菜の花が咲くころの情景を詠んだ句と相まって、長閑な菜の花畑を見ているような錯覚を覚える。また、添画の蓑笠は子規が旅に愛用し、子規庵に掛かっていたもので、象徴的な意味が込められている。

本作のように掛軸には作品を引き立たせるような裂地や紙が取り合わされているものも多い。ぜひ、表装もあわせて観ていただきたい。

作者	：正岡子規(1867-1902)、下村為山(1865-1949)
作品名	：菜の花十句原稿(正岡子規)、添画(下村為山)
制作年	：不詳
技法・材質	：墨書、墨画・紙本
サイズ	：81.8×26.3cm/23.2×23.7cm(原稿部分)



《菜の花十句原稿(正岡子規)、
添画(下村為山)》 当館学芸員 務臺歩



MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

今後の展覧会ラインナップ

2026.7-2027.3

ウジェーヌ・ブーダン展



ウジェーヌ・ブーダン<ベルク、出帆>1890年 油彩・カンヴァス ランス美術館
(inv. 907.19.34) ©Christian Devleeschauwer

2026年7月7日(火)～8月30日(日)

「印象派の先駆者」として知られるフランスの画家、ウジェーヌ・ブーダン(1824-1898)。近代風景画の発展に重要な役割を果たし、クロード・モネをはじめ印象派の画家たちに大きな影響を与えました。空や海景など、ブーダンならではの作品群をフランスの美術館などからお届けします。

Sustainable World —佐藤大史・磯部昭子

ふたりの視点から—



© Daishi Sato



© AKIKO ISOBE

2026年9月19日(土)～12月6日(日)

写真家・佐藤大史、磯部昭子。写真という同じメディアを選びながらも、異なるアプローチで対象と向き合う視線の先にあるのは、変わりゆく現在とその価値観。本展では、幅広い表現領域で世界をけん引するセイコーエプソンとの共創によって、ふたりの視点が高解像度で現れます。

生誕200年記念 中林梧竹展



《慈恵》1911(明治44)年 徳島県立文学書道館蔵

2027年1月16日(土)～3月22日(月)

「明治の三筆」と称される書の大家・中林梧竹(1827-1913)。50代半ばに中国清朝に渡り、当時最先端の書法を学んで独自の書境を拓き、各書体において異彩を放ちました。本展では、代表作を中心に信州や松本平ゆかりの作品資料を展示します。

身近な

ART

手のひらの道具と、心に残るデザイン

当館学芸員 瀧田見 彰



我が家のサンリオグッズ

このコーナーで、2回(2008年、2011年)携帯電話について触れてきた。初回では、いつも持ち歩くものとして財布と携帯電話(当時はガラケー)を挙げ、両者の買い替えのタイミングの違いについて書いた。その3年後の原稿では、スマートフォンへ移行したことで、画面に映る情報を中心になり、モノそのもののへの愛着が薄れていった。今では、財布の役割もスマートフォンが担うようになり、記録のための大切な道具になっている。一方で、私自身はそこに道具以上の特別な価値を見いだしにくくなっている。

先月まで開催していた「サンリオ展」には、冬期にもかかわらず、連日たくさんのお客様が足を運んでくださった。平日は未就学児のお子さんを連れただ母さん、週末には三世代で楽しそうに鑑賞される姿も見られ、いつもの美術館とは少し違う、あたたかな賑わいに包まれていた。

サンリオのキャラクターたちは、グッズだけでなく、文房具や衣類、食品など、さまざまな形で生活の中に溶け込んでいる。幼い頃に使っていたものや、友達が持っていたものを、今でも鮮明に思い出せる人も多いだろう。たとえばモノ自体は手元から離れてしまっても、その時の気持ちや風景と一緒に記憶に残り続ける——そんなデザインの力を改めて感じた。

人物往来

昨年11月1日より美術担当として務臺歩が着任しました。また、本年3月末日をもって副館長の武藤美紀、企画運営担当の原智之、美術担当の北原麻椰が異動となりました。4月1日より副館長として大久保ふみ枝、企画運営担当として山村里佳、中門登志子、美術担当として藤原裕希が新たに着任しました。今後とも松本市美術館をよろしく願っています。